様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年　　6 月　19 日現在

機関番号：32816
研究種目：基盤研究（B）
研究期間：　平成 22 年度～平成 24 年度
課題番号：22330182
研究課題名（和文）　相互作用「場」を活性化するコミュニケーション力の研究

研究課題名（英文）　A study of communication skills to activate interactive “field”

研究代表者
大坊郁夫（DAIBO IKUO）
東京未来大学・モチベーション行動科学部・教授
研究者番号：50045556

研究成果の概要（和文）：
対人関係を適切に解読することを学ぶことによってコミュニケーションの誤りは少なくなり、親密な関係を発展させることが可能になる。コミュニケーション行動の特徴を基にして関係を判断しており、その判断を基にして相互作用している。主として、同性による 2 者間会話、 異性による 2 者間会話、4 人集団による会話実験を実施の研究成果を踏まえて、相互作用相手との関係開始・継続の動機、相互作用についての満足、課題解決場面での解決行動との関連について、自他の認知、言語、非言語行動の指標群から場の活性化を目指すために有効なコミュニケーション行動を明らかにすることを目指した。2 者間会話の活性化としては、発話時間，手の動きの大きさ，ジェスチャー，頭部移動が有効な指標であった。解決課題の有無を条件とした 4 人集団会話では、コミュニケーション行動と葛藤認知，心理的な満足度等との関連について検討した.課題解決条件は意見を出し合うことに伴う葛藤が高まりやすいが,同時に参加度,満足度も高い．チャット条件では社会的外向性や非言語的な表出スキルなどの個人特徴が有意な効果を示していた．話し合いに対する満足感は，課題解決条件では話し合いへの積極的な関与が，チャット条件ではメンバーへの配慮が各々重要な要因であった．集団場面での課題解決には主張，他者認知，傾聴，関係調整等の多くの社会的スキルが必要になり，トレーニングの有効なプログラムとして今後の活用がさらに期待される.

研究成果の概要（英文）：
Learning to decode interpersonal relationships more accurately helps prevent miscommunication and the ability to develop intimate relationships. We judge others’ relationship characteristics implicitly on the basis of specific features of their communication behavior and we interact with others on the basis of these judgments. Mainly, dyadic conversation (between same-sex and between cross-sex), conversation among four participants were conducted in this study project. We examined relationships between nonverbal cues (hand movements, interpersonal distance, head direction and the amount of utterance) and skills for building /maintaining relationships, satisfaction for interaction and skills for conflict resolution. The sorts of efficient communication behaviors for to activate interaction setting (field) were carry out in this project. It was shown that utterance duration, hand movements, gesture had a positive effect on activation in dyadic conversation. The participants of task-oriented group, compared to non-task-oriented group, felt more contributive and satisfied, but also conflicted about their own conversation. Participants accomplished the tasks felt more relationship conflict and contributed more than participants non-accomplished. In non-task-oriented condition, social skill and extraversion had significant effect on the evaluation to each other. The satisfaction in conversation was derived from active discussion on task-oriented condition, but was based on warm consideration to members on chat condition. Since task-oriented conversation in small group consists of self-assertion, listening, interpersonal judgment, and interpersonal management, it is suited for an effective module of social skills training.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
22 年度	6,700,000	2,010,000	8,710,000
23 年度	3,700,000	1,100,000	4,800,000
24 年度	2,400,000	720,000	3,120,000
総　計	12,800,000	3,830,000	16,630,000

研究分野：社会心理学
科研費の分科・細目：心理学・社会心理学
キーワード：対人コミュニケーション、社会的スキル、コミュニケーション力、非言語コミュニケーション、well-being、場の活性化、発話行動、対人関係、問題解決

1. 研究開始当初の背景

言語的、非言語的コミュニケーションは、個々人の心的メッセージを伝えるものであり、すべての対人関係の基礎となり、社会的行為の連鎖を形成するものである。そのメッセージの記号化・解読を正確に、迅速に行わねばならない。この過程を経て、人は、それぞれの目標を持った集団において、その目標達成を図ることができる。集団の目標は多岐に渡るが、その場において、相互のコミュニケーションを活性化することは共通して期待される。そのためには、コミュニケーションの記号化、解読、そして、相互作用の調整、さらに、状況に応じて個々のスキルを繰り出す調整力を適切に発揮することが必要である。すなわち、社会的スキルの「実践化」である。

相互作用者が、互いの意図や感情を共有し、相互の満足を高めるためには、考えや感情を正確に伝え、解読することに始まり、かつ、必要なスキルを柔軟に発揮できなければならない。それは、個人の well-being を高め、さらには、単純な加算ではないが、当該の関係や集団の well-being を増すことになる。

これまでは、コミュニケーション・チャネルとして、発話、ジェスチャー、顔面表情に注目し、また、個人の基本的な感情や親密さの表出性を取り上げ、主に、1)基本的には意識的ではあるが、意図・無意図性が混在する顔面表情の表出と認知、2)話しの上手さを主題とする非言語的コミュニケーション手段の相互関連性の把握、3)問題解決場面における話し合い行動の分析を行った。この結果から、顔面表情の表出力を高めるためには、教示のみではなく、手本となる写真模倣法の有効さ、親和性増大には、ジェスチャー、うなずき、自己主張については発話の活発さ、視線交錯が有効であることを示してきた。

また、相手との会話において円滑さを示す“話しやすさ”は、会話条件によって大きく異なる（大坊、2005）。討論条件では聞き手的な役割を担う場合に話しやすいと評定されるが、互いを知り合う条件では会話において中心となって情報提供を行なう役割が話しやすいと評定されている。つまり、討論では相手の発言にコメントなどを挟まず聞き手に専念することが「話しやすい」という印象を与えるのに対して、知り合う条件では発話することによって、情報を積極的に提供していくことが話しやすいと評定される。知らない者同士の関係では、発言することは、判断の手がかり情報を提供し合うことであり、相互作用を有効なものとする。

社会的スキルは，コミュニケーションの基本的な機能発揮による基礎スキル－記号化、解読やこの両者のタイミングの調整などの対人コミュニケーション能力－を基底とする階層性を持つと考えられる（大坊、2006）。個人の、そして社会的 well-being を実現するために人間科学を追究するためには、この視点を踏まえなければならないはずである。この研究では、目的や状況に合わせて、個々のスキルをその階層性を勘案するならば、どの順番に発揮するか、どう組み合わせて用いるかという統制・調整機能を適切に発揮することが大事であり、それを踏まえることで、目指す円滑な適応が可能となろう。このような視点から、well-being を目指すために欠かせない、対人コミュニケーション行動を相互作用の場の諸要因―ここでは、個人、課題を中心に―を操作したコミュニケーション実験を設定した。そして、これまで展開してきた社会的スキル・トレーニング研究と総合する視点をも持って検討した。

2. 研究の目的

目標に見合った相互作用「場」の活性化を向上させることを研究のねらいとし、主に対人関係の成否にかかわる、最小の基本単位である 2 人と集団内の拮抗、連携の基本的パターンが生じやすく、そのパターンを少人数ながら容易に観察しやすいより多人数（4 人等）の対面のコミュニケーション行動を収集し、場の活性化をもたらす特徴を抽出することを基本的な目的とした。参加者の社会スキルなどの個人要因との関連を明らかにする。なお、参加当事者と第三者とがコミュ

ニケーション行動を観察し、「場」の活性化（コミュニケーションの活発化・円滑化、関係開始・維持・円滑化、満足感の上昇）にかかわる特徴についての認知的判断を検討する。この場合、検討する場面として、実験室とインフォーマルな場面を設定して、場面の特徴の違いも明らかにする。この経過から得た円滑な相互作用をもたらす言語的、非言語的コミュニケーション特徴を踏まえて、異なる目標の達成を前提として、相互に気づき合える、場の活性化を促すためのコミュニケーション力の向上を意図した。

具体的には、(1)対人コミュニケーションの表出と解読についての実験、(2)対人コミュニケーション行動、対人関係の認知・解読、(3)場の活性化を促す行動手がかり・パターンの抽出について検討した。

3. 研究の方法

参加者数、同性異性要因、課題条件を操作した対面の会話事態を設定し、以降に述べる複数の発話行動指標、非言語行動指標を設定し、その指標値と設定した条件との関連を検討し、本研究者らがこれまで得た結果との比較および、社会スキル・トレーニングにおけるコミュニケーション行動の観察への応用的視点を勘案した検討を行った。

(1)同性の2者間会話　研究 1：実験参加者は、関西の大学に在籍する大学生、計 66 名(男性 51 名：20.45±0.99 歳，女性 15 名：20.87±1.51 歳)であった。授業もしくは部活・サークルを通じて実験参加の呼びかけを行い、話者となる 3 人が初対面同士になるように学部や所属する部活・サークルを考慮して実験群を構成した。

研究 2：実験参加者は、関西圏の大学に在学する、116 名(男性 48 名、女性 68 名；平均年齢 18.40 歳，*SD*=0.84)であった。会話実験は、社会的スキル・トレーニングの授業の一環で行った。1 クラス約 20 名を 3 週間に 1 度対象とし、計 5 クラスを対象に実験を実施した。

(2)異性の2者間会話　研究 3：関西圏の大学に在学する学生（男女各 30 名、平均年齢 21.30 ±1.26 歳）を対象に、初対面異性ペアで会話実験を行った。会話の様子は同意の上ビデオカメラで録画した。会話は 2 分間と 10 分間を連続して行い、会話の際には会話行動を測定するための装置の装着を求めた。

(3)4 人集団のコミュニケーション　研究 4：4 人一組で課題に取り組む条件(課題解決条件)と，課題を与えずお互いに知り合いになれるように自由に話をする条件(チャット条件)の 2 つの話題条件を設けた．課題解決条件，チャット条件ともに会話時間は 35 分間とした．実験参加者は，関西圏の大学に在学の大学生 59 組 236 名(男性 88 名，女性 148 名；平均年齢　男性 20.11 歳，*SD*=0.94，女性 20.06 歳，*SD*=0.90)，課題解決条件には 45 組 180 名(男性 59 名，女性 121 名；平均年齢　男性 20.19 歳，*SD*=0.97，女性 20.10 歳，*SD*=0.93)が参加した．チャット条件には，14 組 56 名(男性 29 名，女性 27 名；平均年齢　男性 19.97 歳，*SD*=0.87，女性 19.89 歳，*SD*=0.70)であった．いずれも授業の一環として実施した。

(4)多人数者コミュニケーション研究　研究 5：関西圏の大学に在学の初対面の大学生・大学院生を対象とした会話実験を行った．実験参加者は男女各 3 名，合計 6 名を 1 組とし，環境からの情報提示の有無を操作した会話を 2 回行った．大学生・大学院生，計 107 名(*M*=21.79，*SD*=1.52 ：男性 54 名，女性 53 名)であった。

4. 研究成果

(1)同性 2 者間会話　研究1では、自己評定と他者評定のいずれにおいても「腕の動き」が有意な正の影響を与える傾向が示された。また、自己評定と他者評定の間に比較的強い有意な正の相関関係がみられた。この結果は、話者と会話相手に着目した場合の関係開始スキルを規定する非言語手がかりは、腕の動きであることを示唆するものである。さらに、同様の分析を自己評定と評定参加者 6 名による第 3 者評定の関係開始スキルについて行った結果でも、第 3 者評定において腕の動きが有意な正の影響を与えることが明らかになった。

また、研究 2 では、個人的親しみやすさの変化量が回答者自身の親密度の向上と会話満足度、そして会話相手の会話満足度を高めることが明らかとなった。この結果から、個人的親しみやすさを増加させることは、回答者自身や相手の会話満足度を高め、回答者自身のみならず両者の関係を良好にすることが考えられる。パーソナリティが異なる相手との会話における表出の可変性は、相手との落差を調整し円滑な関係を築く上で重要なことであり、そうした変化は社会的スキルとしての側面をもつと考えられる。また、会話機会前後に実施した他者認知の結果を踏まえるならば、自分の個人特徴を独立変数として検討した結果では、会話満足度について、自分の外向性や推測した相手の外向性の高さが説明力を有していた。相手への親密さ評定の変化の程度については、相手の表現力や自己抑制、外向性が説明力を有し、会話相手の表現力が低く自己抑制の傾向を持ち、外向性の低い場合に、自己の変化の程度が大きくなることを示している。また、自分に解読力があり、自己主張をあまり行わない人ほど、変化の程度が大きいことが示されている。このことから、会話相手や自分の表出の傾向が弱い場合に、変化の程度が大きくなると考えられる。自己変容には相手の外向性など、表出に関連する能力や自他のパーソナリティの落差が影響を与えている可能性が示された。したがって、会話相手のパーソナリティ認知によって、適切な調節により自己変容を行うことで親密度が向上し、対人関係の発展に貢献する可能性が考えられる。これについては、変化や親密度の向上、会話満足度に影響する要因

や因果の方向性を整理し、モデルを構築する必要がある。

(2)異性2者間会話における関係構築に結びつくコミュニケーション行動指標の検討　異性としての関係の親密さおよび友人関係構築願望に影響を及ぼす会話行動を検討するために、会話行動を説明変数、会話後の各願望を基準変数とする重回帰分析(stepwise 法)を行った(Figure 1)。その結果、相手と友人関係を築きたいという願望は相手からのうなずきによって促進される傾向にあった。

参加者の関係開始スキル(低，中，高)を独立変数，各コミュニケーション行動を従属変数とする分散分析を行った。関係開始スキル高群は低群よりも，発話時間，手の加速度の大きさ，ジェスチャー回数，頭部移動回数が有意に多かった。また，発話時間に関しては，関係開始スキル中群は低群よりも有意に発話時間が多かった。以上の結果から，関係開始スキルの低い人は表出性が低いことが示された。

また、友人関係構築願望に影響を及ぼす会話行動を検討するために、会話行動を説明変数、会話後の各願望を基準変数とする重回帰分析(stepwise 法)を行った(Figure1)。相手と友人関係を築きたいという願望は相手からのうなずきによって促進される傾向にあった。

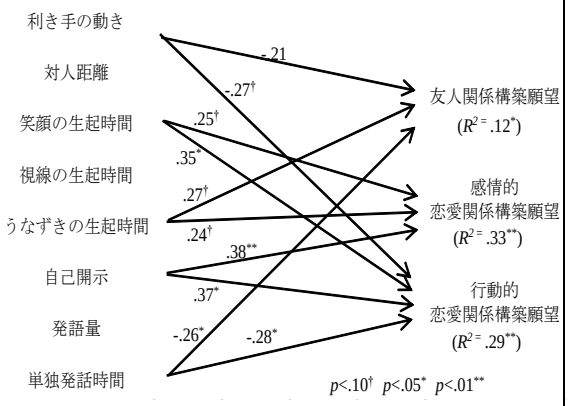

Figure1 会話行動と会話後の認知との関係

(3) 4 人集団のコミュニケーション　課題解決に正解できた組は，積極的に発言し，それに伴って葛藤，緊張を生じやすい．かつ，他者に対する配慮にメンバー間の差は少ない．また，課題解決を要することによって葛藤が生じやすいが，積極的に関与し，意見や葛藤の調整をすることから満足感も大きく(Table1)，社会的スキル・トレーニングに有用であることが分かる。

Table 1 貢献度・満足度・葛藤得点の話題条件比較

話題条件	N	貢献度	満足度	関係葛藤	課題葛藤
課題解決	180	19.7	33.2	13.3	14.8
チャット	56	13.4	30.3	9.0	7.5

(すべて p<.001)

さらに，チャット場面では個人特徴の影響が示されやすいことも示唆された．これらのことから，難易度がそれほど高くない課題場面では適度な競争と配慮がなされ，集団活動の基礎力向上に効果を有すると考えられる．難易度が高い場面は，自己主張，集団生産性向上には適している反面，配慮的側面を補うプログラムを用意する必要がある。また，チャット条件では，社会的スキルやパーソナリティ特徴の影響が表れやすいことから，話し合い特徴を観察する機会を提供することによって自己理解を促進することが可能となろう。

(4)多人数者コミュニケーション研究　参加者の関係開始スキル(低，中，高)を独立変数，各コミュニケーション行動を従属変数とする分散分析を行った。関係開始スキル高群は低群よりも，発話時間，手の加速度の大きさ，ジェスチャー回数，頭部移動回数が有意に多かった。また，発話時間に関しては，関係開始スキル中群は低群よりも有意に発話時間が多かった。

会話中の行動が会話満足度に与える影響を検討するため、会話満足度を目的変数、情報提示なし会話時の話者の非言語的行動指標を説明変数にした重回帰分析（stepwise 法）を行ったところ、男性に関しては、会話満足度に対して非言語的行動指標から有意な影響をもつパス係数は得られなかった。一方で、女性に関しては、会話満足度に対して、発話量、頭部移動回数から有意な正の影響、頭部移動回数から有意な負の影響をもつパス係数が得られた。また、男女とも発話時間は、継続動機と有意な正のパス係数を示していた。

このことから、多人数場面では、視覚的に取られやすい身体動作、および、発言の活発さが高い貢献度と認知されやすいことが示唆される。課題の有無、同性・異性、会話場の人数サイズによって場の活性化は影響される。指標として鋭敏であるコミュニケーション行動は、発言時間、視覚的に手がかりになりやすい、ジェスチャー・腕の動き、頭部移動(うなずき、他者へ視線を向ける)である。なお、参加人数が多くなると、発話(言)の有効性も高く、これは、他者への視覚的な注意の限界を示唆するものでもあろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 26 件)

① 大坊郁夫　ポジティブな社会を築くためのモチベーション～コミュニケーション力・スキルの向上～、日本学習社会学会年報、査読無、9、2013、(印刷中)

② 仲嶺　真、大坊郁夫　2 者間における非言語行動と場の活性度認知との関連、情報通信学会技術報告、査読無、113(72)、2013、223-228.

③ 藤原　健、大坊郁夫　競争/協調と感情状態が表情人物の判断に与える影響、電子

情報通信学会技術報告、査読無、112(412)、2013、 59-64.

④ 大坊郁夫 表情 顔は伝達するー顔手がかりと顔面表情ー、日本語学、査読無、32(5)、2013、105-116.

⑤ 大坊郁夫 共生社会のための対人コミュニケーション研究の視点、モチベーション研究-IMSAR:Annual Report、査読無、2、2013、36-41.

⑥ 毛 新華、大坊郁夫 中国文化の要素を考慮した社会的スキル・トレーニングのプログラムの開発および効果の検討、パーソナリティ研究、査読有、21, 2012, 33-39.

⑦ 横山ひとみ、大坊郁夫 対面説得事態における対人コミュニケーション・チャネルに関する研究ーチャネルの使用とその効果―、社会言語科学、査読有、15、2012, 73-88.

⑧ 藤原 健、大坊郁夫 感情が言語行動に与える影響―二者間会話場面における定量的検討―、社会言語科学、査読有、15、2012、29-37.

⑨ 大坊郁夫 対人関係展開のためのスキルとしての対人コミュニケーション力～間を含むコミュニケーションの有用性～、武庫川女子大学生活美学研究所紀要、査読無、22、2012、33-47.

⑩ Hitomi Yokoyama and Ikuo Daibo Effects of gaze and speech rate on receivers' evaluations of persuasive speech 、*Psychological Reports*, 査読有、110, 2012、663-676.

⑪ 大坊郁夫、松山早希、藤原 健 小集団の問題解決場面におけるコミュニケーション行動と対人認知との関係～社会的スキルと対人関係～ 電子情報通信学会技術研究報告, 査読無、111(393)、2012、21-26.

⑫ 木村昌紀、磯 友輝子、大坊郁夫 関係に対する展望が対人コミュニケーションに及ぼす影響ー関係継続の予期と関係継続の意思の観点から―、実験社会心理学研究、査読有、51、2012、69-78

⑬ 倉元俊輝、大坊郁夫 学生のコミュニケーション・スキルの特徴に関する研究―ENDCOREs を用いた検討―、対人社会心理学研究、査読有、12、2012、149-156.

⑭ 藤原 健、大坊郁夫 二者間会話場面における非言語行動の抽出法―動画・音声解析ソフトとイベントレコーダーについての比較検討―、対人社会心理学研究、 12、査読有、2012、165-172.

⑮ 朴 喜静、大坊郁夫 欺瞞時に、生じる感情が非言語的行動の変化に及ぼす影響ー顔面表情に着目してー、電子情報通信学会技術研究報告、査読無、111(464)、2012、35-40.

⑯ 松山早希、大坊郁夫、谷口淳一 2 者間会話におけるパーソナリティ認知と自己の表出との関連、電子情報通信学会技術研究報告、査読無、111(464)、2012、73-78.

⑰ 藤原 健、大坊郁夫、松山早希 小集団の問題解決場面におけるコミュニケーション行動と対人認知との関係 (2)～ コミュニケーション行動と対人関係 ～、電子情報通信学会技術研究報告、査読無、111(464)、2012、79-84.

⑱ 前田奈穂、横山ひとみ、藤原 健、大坊郁夫 会話行動が関係開始スキル評価に与える影響 1)―発話内容とハンド・ジェスチャーを用いたマルチ・チャネル・アプローチによる検討―、社会言語科学、 査読有、14、2011、171-187.

⑲ 松山早希、大坊郁夫 対人認知課題を用いた社会的スキル・トレーニングの研究、電子情報通信学会技術研究報告、 査読無、111(59)、2011、183-188.

⑳ 前田奈穂、大坊郁夫、藤田和之 関係開始スキルがパーティ場面における コミュニケーション行動に及ぼす影響、電子情報通信学会技術研究報告、査読無、111(190)、2011、5-10.

㉑ 大坊郁夫 Well-being を高めるために、対人コミュニケーションを活かすために、対人社会心理学研究、査読有、11、2011、29-32.

㉒ 倉元俊輝、大坊郁夫 2 者間事態における会話行動が葛藤に及ぼす影響 ～ コミュニケーション・スキルに注目して ～、電子情報通信学会技術研究報告、 査読無、110(383)、2010、1-6.

㉓ 藤原 健 、大坊郁夫、前田奈穂、横山ひとみ、前田貴司、岸野文郎、北村喜文、林良彦 複数回会話における会話特徴の変遷ー2 人会話がその後に行う 3 人会話に与える影響ー、電子情報通信学会技術研究報告、査読無、110(33)、2010、79-84.

㉔ 大坊郁夫、横山ひとみ、磯 友輝子、谷口淳一 社会的スキル・トレーニングにおける対人関係解読ーDESIREJ の作成に向けてー、電子情報通信学会技術研究報告、査読無、110(33)、2010、85-90.

㉕ 木村昌紀、大坊郁夫、余語真夫 社会的スキルとしての対人コミュニケーション認知メカニズムの検討、社会心理学研究、査読有、26、2010、13-24.

㉖ 梶村康祐、高嶋和毅、前田貴司、山口徳郎、北村喜文、岸野文郎、前田奈穂、藤原 健、横山ひとみ、大坊郁夫 3 人会話における「場の活性度」の自己と第三者の評価の比較、電子情報通信学会技術研究報告、査読無、110(185)、2010、43-48.

〔学会発表〕(計 24 件)

① Ikuo Daibo 、Saki Matsuyama 、and Ken Fujiwara The Communication behavior and interpersonal perception in task oriented

small group－Social skills and interpersonal relationships－、10th Biennial Conference of Asian Association of Social Psychology、21-24August 、YogJakaruta 、Indonesi 、2013

② 横山ひとみ、大坊郁夫 対人関係開始スキルがコミュニケーション行動に及ぼす行動、日本応用心理学会第 80 回大会発表論文集(印刷中)、2013.

③ Shin Nakamine and Ikuo Daibo The effect of communication behaviors during the dyadic interaction on interpersonal attraction 、Third Asian Conference on Psychology and the Behavioral Sciences、Osaka、2013.

④ Hitomi Yokoyama and Ikuo Daibo Study of verbal and nonverbal behaviors in face-to-face persuasion and their effects、14th Annual Meeting of the Society for Personality and Social Psychology 、New Orleans USA 2013、231.

⑤ Ken Fujiwara and Ikuo Daibo The influence of competition / cooperation and affective state on the impression of a smile、14th Annual Meeting of the Society for Personality and Social Psychology, New Orleans USA 2013、216.

⑥ 横山ひとみ、大坊郁夫 対面場面における説得の規定因の検討～対人コミュニケーション・チャネルに着目して、日本心理学会第 76 回大会発表論文集、 2012、94.

⑦ 仲嶺 真、大坊郁夫 異性間の関係構築に影響を及ぼす会話行動特徴の検討―関係の分化に着目して―、日本社会心理学会第 53 回大会発表論文集、2012、 102.

⑧ 松山早希、大坊郁夫、谷口淳一 2 者間会話におけるパーソナリティ認知と自己の表出との関連、日本社会心理学会第 53 回大会発表論文集、2012、165.

⑨ Saki Matsuyama and Ikuo Daibo The Effect of Personality Perception and Self-expression in Dyadic Conversations、Conference of Korean Psychology Association、Chuncheon, Korea,2012.

⑩ Hee Jung Park & Ikuo Daibo The effect of deception ability on changes in facial expression when lying 、Conference of Korean Psychology Association 、Chuncheon, Korea,2012

⑪ Hitomi Yokoyama and Ikuo Daibo How we do persuade others? Forcusing verbal and nonverbal channels 、Conference of Korean Psychology Association 、Jeonju 、2011.

⑫ Hee Jung Park and Ikuo Daibo Relationship between the ability of deception and self consciousness 、Conference of Korean Psychology Association、Jeonju、2011.

⑬ Hitomi Yokoyama and Ikuo Daibo The study of verbal channel in face-to-face persuasive interaction 、9th Biennial Conference of the Asian Association of Social Psychology, Kunming, China、2011.

⑭ Ikuo DAIBO, Hitomi Yokoyama, Saki Matsuyama, Yukiko Iso, and Junichi Taniguchi Accurate Decoding Interpersonal Relationships in Social Skills Training、9th Biennial Conference of the Asian Association of Social Psychology、Kunming、 China、2011.

⑮ Ikuo DAIBO, Hitomi Yokoyama, Saki Matsuyama, Yukiko Iso, and Junichi Taniguchi, Ken Fujiwara Important role of Nonverbal Communication in Social Skills Training(1)、12th European Congress of Psychology, Turky、2011.

⑯ Saki Matsuyama, Ikuo Daibo, Hitomi Yokoyama, Junichi Taniguchi, Yukiko Iso and Ken Fujiwara Important role of Nonverbal Communication in Social Skills Training (2)、12th European Congress of Psychology, Turky、2011.

⑰ 大坊郁夫 コミュニケーション力は役に立つ―お互いにわかり合うためのスキルを磨く―、北海道心理学会・東北心理学会第 11 回合同大会シンポジウム「心理学が社会の中で役に立つこと」、2011.

⑱ 大坊郁夫 お互いにわかり合うためのスキルとしてのコミュニケーション力、東海心理学会第 60 回大会、2011.

⑲ 藤原 健、大坊郁夫、酒井竜平 会話事態における欺瞞に関する感情についての実験的研究、日本感情心理学会第 19 回大会・日本パーソナリティ心理学会第 20 回大会、2011.

⑳ 前田奈穂、大坊郁夫 多人数パーティ場面におけるコミュニケーション行動と関係開始スキルの自己評価との関連、日本社会心理学会第 52 回大会発表論文集、2011、253.

㉑ 横山ひとみ、大坊郁夫 対面説得場面におけるコミュニケーション特徴の検討、日本社会心理学会第52回大会発表論文集、2011、292.

㉒ 横山ひとみ、大坊郁夫 対面説得場面での送り手の非言語的行動の検討、日本社会心理学会第 51 回大会発表論文集、2010、596-597.

㉓ 倉元俊輝、大坊郁夫 会話場面における相手のコミュニケーション・スキル認知、日本社会心理学会第 51 回大会発表論文集、2010、292-293.

㉔ 大坊郁夫 関係、場を活性化するコミュニケ

ーションの展開、第 13 回知識科学シンポジウム「メディア技術によるソーシャルリアリティ創出」講演予稿集、2010、21-35.

〔図書〕(計 2 件)

① 大坊郁夫 場の活性化を高める:対人コミュニケーションの社会心理学(高木修監修 大坊郁夫・竹村和久編「現代社会心理学の動向(仮称)」(2013 印刷中、北大路書房)

② 大坊郁夫 対人関係における配慮行動の心理学ー対人コミュニケーションの視点ー(三宅和子・野田尚史・生越直樹(編) 社会言語科学シリーズ 1 「配慮」はどのように示されるのか p.51-67.ひつじ書房)2012.

6. 研究組織

(1)研究代表者

大坊 郁夫(DAIBO IKUO)

東京未来大学・モチベーション行動科学部・教授

研究者番号:50045556

(2)研究分担者

磯 友輝子(ISO YUKIKO)

東京未来大学・モチベーション行動科学部・准教授

研究者番号:00432435

谷口 淳一(TANIGUCHI JUNICHI)

帝塚山大学・心理福祉学部・准教授

研究者番号:60388650

(3)連携研究者 なし

(4)研究協力者 なし